

みんなの居場所

頭の体操コーナー

裏に頭の体操クイズを載せています。
小学校で学習することをベースに作っ
ています。出来る出来ない関係なく、ご家
族でチャレンジしてみてください。会話
が広がります。

令和7年4月14日(月)

勉強は学校の大きな一つの読書

スタートを切った令和7年度、ホジティブに積極
的に楽しんでいくこと、改めて自分自身に言い聞か
せています。

さて皆さん、読書に親しんでいますか？ 私澤田
は、比較的読書量が多い学生時代を過ごしたので、
図書館にはよく通いました。今でも図書館や本屋
さんに行くことが楽しみにしています。そして、必要
性が高まるお金を貯めて買おうと思っています。そ
うすると、大切に読む本が違ってきます。何度も
読み返して、確実に自分のものになると思ってい
ます。更に、手元に置いておくことで、その時々で感
じるものにも違いが出てきます。ちなみに、十数
年前県庁へ通勤中のバス、電車の中で一年間に
10冊ほどの本を読みました。毎日40分ほどの時間
ですが、集中すればこれだけの本が読めるのです。

今の教科でも読むことが基本ですから、国語の学
習や読書は、大変重要ですね。算数の学習をする場
合、何を問われているのか問題の意味(題意)を理
解し、その方法を考え、答えを導き出します。最近
の問題は、問題文そのものが長く、題意を理解する
のが難しいものもあります。6年生を対象に実施さ
れる「全国学力・学習状況調査」のB問題や、熊本
県が行っている学力テスト等の問題は、文章、図
グラフ、資料を問題の中に配置されており、そこ
から総合的に情報を得なければなりません。そうし
なければ、問題を解くことができません。というこ
とでは、算数の問題を解くにも、語彙力と文
章読解力、情報を元にした思考力、判断力が必要
なのです。だからこそ読書は大切で、国語辞典を手
にして、多くの本を読むことが大切だと感じています。
ご家庭でも読書について、話題にして頂ければあ
がたいです。今後、子どもたちも楽しみにしてい
るゴールデンウィークが待っていますが、この際これ
まで読めなかった本を読んでみてはどうでしょ
うか？ 私澤田、最近は何となくとした時間がない
のですが、それでも毎日読書しています。それによ
りも読書(ついでに...)が多いです。

自分自身を律するために肝に銘じて

江戸時代会津藩の教え

数年前のころ、NHK大河ドラマ「八重の桜」で「ならぬこ
とはならぬです」という言葉が出てきてうれしくなりま
した。このころは、私が担任時代に子どもたちと話す時に
「是乃非々」に関する話が多かったです。

- 一つ、年長者の言うことに背いてはなりません
- 二つ、年長者にはお辞儀をしなければなりません
- 三つ、虚言を言うことはなりません
- 四つ、卑怯な振る舞いをしてはなりません
- 五つ、弱いものをいじめてはなりません
- 六つ、戸外で物を食べてはなりません
- 七つ、戸外で婦人と言葉を交えてはなりません

七つめを除いて、私には非常に納得できるものばかりです
が、保護者の皆様は如何ですか。この教えはこのような文
結はれます。

ならぬことはならぬのです

あらためてこの言葉を論理で説明しようとする現代社会にお
いて「タヌキ」は「タヌキ」として教えるこの教えは、私には非常
に新鮮な感じがします。

さて、現代の子どもたちを客観的に見て、7項目全てに何
かしらあてはまることがあるような気がします。1つ目、大人
(教師も含む)の言うことを「ええ」といって返事。2
つ目、朝からお辞儀をして挨拶することができている。3つ
目、3つ目、嘘を言っていない。4つ目、自分を見下すよう
な嘘は言っていない。5つ目、卑怯な行動をしていない。6
つ目、それを指摘され、素直に改善している。7つ目、学級の中
の友達、男女の隔ちなく声をかけている。8つ目、一緒にい
る仲間たちを大切にしている。9つ目、この教えは、今、最
も必要なものなのかもしれません。何があっても「タヌキ」
は「タヌキ」...。ゴールデンウィークに入ります。思わぬトラブル
に巻き込まれることが無いように、7つの教えについて、ご
家庭でも言葉の問題として頂きたいものです。

シリーズ「自分を語る」#②

いわゆる、物心つくまでの時代、私は、只ひたす
ら外では遊びでいたように思います。熊本市内
の今の北区清水町の新地団地に住んでいたのです
が、市内の北の端に住んでいたこともあり、周り
はまだ自然に恵まれていました。そのせいか、今
でも当時の懐かしい場所へふらふら行ったりの
び生活していたように思います。

幼稚園入園前の出来事で、今でもうすらと覚えて
いることがあります。それは、工事現場で遊んで
いてケガをしたことです。今では工事現場に入っ
て遊ぶものなら、こびりこびりしますが、その
当時は大らかな時代だったようです。団地近くに
「鈴が原」というバス停がありました。そのすぐ近く
に5階建てのアパートがあったのですが、そのア
パートは私が幼稚園入園前にできたものなのです。
例によって、色々な建築資材や重機なども搬入され
冒険心に火がつき、中に入って遊んでいたようです。
当時の工事現場では、「立ち入り禁止」の札も無か
ったような気がします。私は工事現場のクラッシュ
アンプと呼ばれる砂利の山に登って遊びの好きだ
ったので、山のてっぺんまで駆け上ったり、駆
け下りたりしていたように思います。その山に駆け上
るべきところ、要領もよくなくて少し勢いが付き過
ぎたので、うっぺんから逆方向に向かっ
てしまいましたが、さあ大変。私は「気を付け」
をした状態で砂利の山を仰向けになって滑り落ちま
した。そして立ち上がり、頭を舐め、め、め、めと
た生暖かい感覚が...。右後頭部に砂利による切
傷が出来ていて、血が出ていました。痛みはあまり感
じていなかったように、そのまま家に帰って、母
親がびっくりして病院に連れて行ったという出来事
でした。今風に言えば「ワイルド」な生活をしていま
した。「ワイルド」よりも「ワイルド」なのは「感無
」かもしれません。しかし、外遊びでの経験は、今
でも子どもたちに話す他愛のない話の中にも生
きています。(つづく)